



FESTIVAL

# SEINAN GAKUIN GLEE CLUB

Hats off to the past, Coats off to the future.

2019

# SEINAN CHANTEURS



CONCERT

# 西南学院グリークラブ 創立100周年記念フェスティバル

2019年9月22日(日)・アクロス福岡シンフォニーホール

《第1部》  
創立65周年記念  
**西南シャントゥール 第42回定期演奏会**  
**13:00～15:00**

《第2部》  
**西南学院グリークラブ フェスティバル**  
**16:30～19:00**



西南学院グリークラブOB会  
西南シャントゥール  
会長  
**黒江 量二**

本日は、記念フェスティバルにご来場いただきありがとうございます。  
おかげさまで西南学院グリークラブは100周年を迎えることとなりました。学院とともに歩き一クラブの歴史にとどまらず、西日本合唱界を代表しうる史実を残せたことは、OBとして何物にも代え難い喜びであります。

周年事業の準備中、ずっと頭から離れないことがあります。40周年記念誌にある昭和18年の出来事「戦前最後の演奏会……そして解散」です。

この演奏会は、卒業生にとっては最後であっても、グリーにとって、戦後再開されるまで誰が最後の演奏会となることを予想したであろうか。演奏会が済むと、誰いうともなく、日頃練習していたピアノの周りに集まり、あれこれと歌い出し、最後に「兵士の合唱」を歌った。これが済むと卒業生たちは互いに手をとり合って、涙を流しながら、いつの日か再び「兵士の合唱」を歌いたいものだといろいろ語り合った。この後、劇や演奏会等の上演は一切禁止され、グリーも演奏会を開くことが出来なくなり、グリーの活動はこの演奏会を最後に停止してしまった。グリーからも、戦争が敗色濃くなるにつれ戦線へと召集され、再び帰ることのできなかつた人々が多くあり、靈安らかなれと祈るばかりである。』

100年の間には、戦争による危機と、平成6年に部員が0になる危機がありました。これらを乗り越えてこれたのは、グリーメン一人ひとりが「仲間ともう一度歌いたい」という火種を持ち続けてきたからではないかと思います。

さらに、石丸 寛氏、福永陽一郎氏をはじめ、熱意溢れる指導者に恵まれたことを抜きにして100年を語ることは出来ません。あらためて、この激動の歴史を支えていただきました皆さんに厚く御礼申し上げます。

本日は客演指揮者として、グリークラブの定期演奏会で通算22回の客演指揮をしていただきました福永陽一郎氏のお孫さん、小久保大輔氏をお迎えしました。お忙しい中、こころよくお引き受けいただきましたことを心から感謝いたします。特に、氏の指揮でシャントゥールが演奏します多田武彦作曲の「富士山」、フェスティバルの合同で演奏します清水脩作曲の「月光とビエロ」は、いずれも不朽の名作です。学生時代とは一味違う、卒業後の人生経験が描き出す組曲をお聴きいただけますよう、仲間と心を一つにして歌います。

最後になりましたが、この演奏会のために多くの方々のご尽力をいただきました。心より御礼と感謝を申し上げます。そして今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ごあいさつ



西南学院大学  
学長

**G.W.バークレー**

西南学院グリークラブの創立100周年を心よりお慶び申しあげます。

また、グリークラブOBの皆様方におかれましては、平素より大学及び現役生に対して格別のご指導ご支援を賜り、大学を代表し、厚くお礼申しあげます。併せて、OBの皆様方によって1954(昭和29)年に創設された男声合唱団「西南シャントゥール」も、今年で創立65周年を迎えるということで、心よりお祝い申しあげます。

西南学院グリークラブは、1919(大正8)年の創設以来、戦前戦後の激動の時代の中で幾多の苦難を乗り越えてこられました。皆様もご存じのように、1990年代には100名を超える部員を擁し、定期演奏会のみならず国内外での演奏旅行においてその美しいハーモニーを披露してこられましたが、2000年代初めから部員数が減少し、一時は休部状態という危機にも直面しました。しかし、そのような中、OBの皆様のご尽力により徐々に部員数も増え、2011(平成23)年には定期演奏会が開催されるまでになりました。これもひとえに、合唱音楽のもつ魅力に加え、これまでグリークラブに携わってこられた関係者の皆様のご尽力の賜物であると思います。

本日は、西南学院グリークラブ創立100周年記念事業として、第1部に西南シャントゥール第42回定期演奏会が、第2部に西南学院グリークラブ・フェスティバルが開催されます。現役時代を彷彿とさせるOBの皆様の歌声や、現役部員の日々の練習の成果を心ゆくまでお楽しみいただければと思います。

最後になりましたが、西南学院グリークラブを支えていただいている全ての皆様のご健勝と、西南学院グリークラブの今後の更なる発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



西南学院大学同窓会  
会長

**岩崎 文正**

校歌に「命」吹き込む  
「やっぱ良かね」西南グリー  
～在学生も身近に歌ってほしい～

大学同窓会総会当日の7月5日。オープニングで「Ah Seinan!」、終盤のしめくくりで「西南学院校歌」をグリークラブOB会のみなさんに演奏してもらいました。クラブ創立100周年を記念して特に出演していただいたものですが、最後の校歌演奏の時のことです。正調で聴くのは、久しぶりだったからかもしれません。私は急に懐かしさがこみ上げ、涙目になりましたが、「やっぱ良かね、西南」と心の底で叫んだのです。(この「やっぱ…」は江副高校同窓会長の決めゼリフの借用ですが、自然に浮かんだものですから仕方ありません)

通常、総会のラストは参加者だけで肩を組み、校歌を合唱します。中には目頭にハンケチを当てる人もいますが、お酒も入っているし、だだっ広い会場ですので、あっちこっちでフシや歌詞がズレたりして、全体としてシマリを欠くこともあります。

もちろん、多くの参会者にとっては、年に一度の校歌ですから、みんなで歌うことだけで、同窓の「絆」を確認するには、これで十分でしょう。しかし、西南の魂に触れたような、思わず感涙にむせぶような、そんな歓喜の高みを全員で共有するというには、当然のことですが、少々の無理があります。

しかし、今回のようにグリーのみなさんから、格調高く校歌を歌い上げていただく。それを聴いた時、私たちは「さあ、頑張ろう」と新たな力が湧き上ります。不思議です。なぜでしょうか。それは、校歌の歌詞とメロディに込められた西南創生時の燃え立つような「使命感」や「期待感」が、グリーの声を通じて同窓の心に響き渡り、校歌が校歌としての「命」の火を燃やすからではないかと思います。

改めてグリークラブの100周年、まことにめでとうございます。そのためたさに便乗し、押し付けるようで恐縮ですが、ここで同窓会長としての年来の「夢」を語らせてください。

ひとつは学院に関わる夢ですが、在学生全員が少なくとも三番まで正確に校歌を歌えるようにできないか。もうひとつは、同窓会支部の定期総会でも、時々グリーに演奏の機会を持っていただけないか、という夢です。



福岡県合唱連盟  
九州支部長  
**岩崎 洋一**

西南学院グリークラブ創立100周年と西南シャントゥール創立65周年の2団体の演奏会が企画された。その2団体の歴史を振りると、合唱文化の先駆者として福岡の地にはなくてはならない扱い手であったことがよくわかる。

西南学院グリークラブの誕生は1919(大正8)年との事。その輝かしい活動は各種演奏会への出演や、戦後の全日本合唱連盟のコンクール全国大会へと大きな足跡を残している。その後、活動の幅を広げ、大阪、東京、アメリカ、ヨーロッパの演奏旅行へと展開させている。

近年、全国的にも大学男声合唱団の部員減少が続いているが、西南学院グリークラブに部員がない時期があったものの、OBの再興への働きかけで、2015(平成23)年には定期演奏会を再開、2019(令和元)年には合唱連盟への再加盟もなされ、これから大きな期待が持たれている。

一方、OBの西南シャントゥールは、多田武彦氏への複数の委嘱作品をはじめ、定期演奏会はアクロス福岡シンフォニーホールを満席にして、演奏の魅力と男のロマンを追求する姿がまぶしい。ロマンスグレーの髪でエンブレムつきのプレザーをさっそうと着込んだ姿はいつまでも青年なのだ。

今回の演奏会は、シャントゥール・グリークラブの2部構成で進められ、「富士山」「月光とピエロ」をはじめ、石丸寛氏や福永陽一郎氏の編曲など、男声合唱の代表作品や日本を代表する方々の足跡を感じさせる曲目が並んでいる。

このように西南学院グリークラブの合唱の歩みを感じさせる演奏会だが、一つのエピソードとして、1937(昭和12)年ごろに英文科の藤井泰一郎教授が日本語に訳された「いざ起て戦人よ」は、今や全国の男声合唱の定番曲であり、誰もが口ずさむ歌となっている。アンコールでは聴くことができるだろうか?聴き逃せない演奏会の幕はあがる。

おめでとうございました!



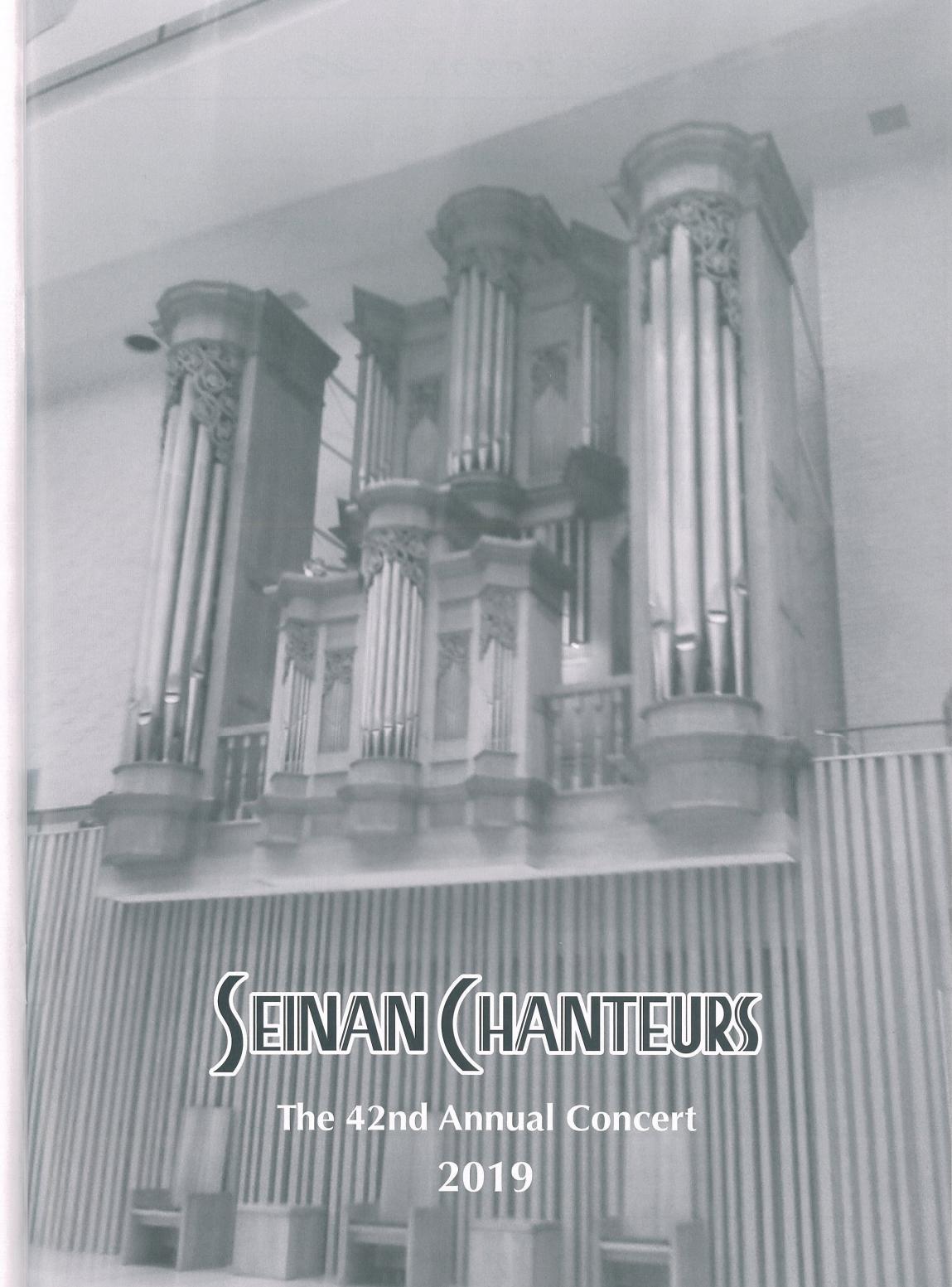
西南学院グリークラブ  
部長  
**武井 俊詳**

西南学院グリークラブ創部100周年記念演奏会にお越しください、誠に有難うございます。西南学院創設1916(大正5)年の3年後の1919年にチャペル・サービスの器楽・合唱のグループとして誕生し、昭和に入り器楽部門は音楽部に、そして合唱部門が「グリークラブ」として独立し、1934年(昭和9)に第1回定期演奏会を開催し西南学院グリークラブとしての船出をしました。

元来船旅は、果てしない大海原に、順風満帆もあれば、荒波、濃霧、暴風雨、猛暑など気まぐれな自然現象に見舞われる波瀾に満ちた道程です。西南学院グリークラブの100年の道程も波瀾の船旅そのものでした。

最初の暴風雨は大戦。学徒動員発令の1943年の第9回定期演奏会は「涙のコンサート」。これを以て活動は中断。戦後、幸運にも、卓越した指揮者・作曲家の石丸寛氏が福岡へ復員され、その指導を受け、1947年開催の朝日合唱コンクールへの初出場を優勝で飾る快挙。以来、1949年の西南学院大学開学で西南学院大学のグリークラブとなって、「全日本合唱コンクール」出場の通算18回のうち、西部地区優勝16回、全国大会で3位以内5回という実績で、西部地区的グリークラブといえば「西南学院グリークラブ」という順風満帆時代を謳歌。指揮者の大家の福永陽一郎氏、畠中良輔氏、関屋晋氏などの良き指導者という順風に恵まれ、平成の1990年代には部員も三桁に上り、関西学院大学や同志社大学のグリークラブとの交歓演奏会をはじめ国内各地、そして、韓国そして欧米での海外演奏旅行と活動は満帆たるものでした。

ところが、2000年代に入り部員数の激減、2006年にはついに部員0の大嵐。これを救ったのはOBたちの尽力でした。おかげで、2008年に5名が入部。以来、漸増し「男声合唱」として船出を果たし、令和の今年、創部100周年記念演奏会を皆様にご披露できるまでになりました。本日の皆様のご来援が大いなる励みになります。有難うございます。重ねて、ご来聴に感謝申し上げます。



**SEINAN CHANTEURS**

The 42nd Annual Concert

2019

# プログラム

[ I 部]

## yell : Ah Seinan !

作詞/Alma O'Norean Graves・作曲/石丸 寛

## I. 男声合唱とオルガンのための『第二ミサ』 Opus 1

作曲/ Charles Gounod

### ● Kyrie

### ● Gloria

### ● Sanctus

### ● Agnus Dei

客演指揮: 小久保 大輔  
オルガン: 古賀智子

## II. 《贊助》西南グリーOBシンガーズ

### 男声合唱『若者たち』～昭和歌謡に見る4つの群像

編曲/ 信長貴富

#### I 戦争を知らない子供たち(ジローズ)

作詞: 北山 修 作曲: 杉田二郎

指揮: 井手 敏彦  
ピアノ: 植村 和彦

#### II 拝啓大統領殿(Boris Paul Vian)

作詞: Boris Paul Vian, Harold Bernard Berg (訳詞: 高石ともや)  
作曲: Boris Paul Vian, Harold Bernard Berg

#### III ヨイトマケの唄(美輪明宏)

作詞・作曲: 美輪明宏

#### IV 若者たち(The Broadside Four)

作詞: 藤田敏雄 作曲: 佐藤 勝

—— 休憩 ——

# プログラム

[ II 部]

## III. 『ロシア民謡集』

指揮: 毛利正明

### I ヴォルガの舟唄

編曲/S. ジャーロフ

### II コサックの子守唄

訳詞/津川主一 編曲/福永陽一郎

### III オレーグ公の歌

訳詞・編曲/三沢郷

### IV 紅色のサラファン

訳詞/津川主一 編曲/福永陽一郎

### V 郵便馬車の馴者だった頃

訳詞/井上頼豊 編曲/福永陽一郎

## IV. 男声合唱組曲『富士山』

詩/ 草野心平

作曲/ 多田武彦

客演指揮: 小久保 大輔

### I 作品第壹

### II 作品第肆

### III 作品第拾陸

### IV 作品第拾捌

### V 作品第貳拾壹

主催 / 西南シャントワール 共催 / 西日本新聞社・西南学院グリークラブ・西南学院グリークラブOB会  
後援 / 福岡県・(公財)福岡市文化芸術振興財団・福岡市・福岡県合唱連盟・福岡音楽団体連絡会  
西南学院大学同窓会・西南学院大学学術文化会OB/OG連合会

## 男声合唱とオルガンのための『第二ミサ』 Opus 1

【シャルル・フランソワ・グノー】 1818年～1893年 フランスの作曲家

ピアニストの母から音楽を習った後パリ音楽院入学。若くして天才作曲家として認められ、ローマ、パリでの修業を経て男声合唱団の指揮者に就任。生涯を通じ多くのオペラ、宗教音楽を作り、代表作として「ファウスト」「聖セザンヌ」があげられる。

### 【グノーと第二ミサ】

聖職を志していた28歳頃に原型を作曲し、36歳のころに全曲をまとめたと言われる。男声合唱とオルガンによる小規模なミサ曲で、その旋律はシンプルで美しく、実直な信仰心の噴出を感じさせる。

初演は1853年、パリのサンジェルマン・ロクロセロワ教会で、自ら男声合唱団を指揮した。

### 【第二ミサと日本の男声合唱】

日本では1938年に関西学院グリークラブが一部を初演し、翌年に「O Salutaris hostia」と「Domine, Salvum fac」を除いて全曲を演奏。戦後は同グリークラブが全日本合唱コンクールで一部を演奏し優勝した。その後、同学院高等部や早稲田大学グリークラブ等が演奏し、日本の学生男声合唱団に広まった。

### 【エピソード】

その1：グノーが指導する男声合唱団に、後に著名な画家となる「ルノワール」が数年間所属していた。グノーは彼の歌手としての才能を高く評価し、オペラ座の合唱団に入るよう勧めたが、彼の両親に断られ、その才能を大変惜しがった。

その2：第二ミサは「Agnus Dei」の後に「O Salutaris」「Domeine, Salvum fac」を含んでおり、その歌詞には「imperatorem nostrum Napoleonem(我らの皇帝ナポレオン)」と書かれ、ナポレオンに捧げられている。

### 「キリスト」(憐みの賛歌)

主よ、憐れみ給え  
キリストよ 慐れみ給え  
主よ 憐れみ給え

### 「グローリア」(栄光の賛歌)

天のいと高き所には、神の栄光  
地には、善意の人々に平和あれ  
我ら主をほめ、主を讃え、主を拝み、主を崇め  
主の大いなる栄光の故に主に感謝し奉る  
神なる主、天の王、全能の父なる神よ  
主なる御一人子、イエス・キリストよ  
神なる主、神の子羊、父の御子よ  
世の罪を除き給う主よ、我らを憐れみ給え  
世の罪を除き給う主よ、我らの願いを聞き入れ給え  
父の右に座し給う主よ、我らを憐れみ給え  
主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し、  
イエス・キリストよ  
聖靈と共に、父なる神の栄光のうちに  
アーメン

### 「サンクトゥス」(感謝の賛歌)

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、  
万軍の神なる主  
主の栄光は天地に満ち  
天のいと高きところにホザンナ  
(ホザンナ：どうか救ってくださいの意のペラ語)

### 「アニス・ディ」(平和の賛歌)

神の子羊、世の罪を除き給う主よ  
我らを憐れみ給え  
神の子羊、世の罪を除き給う主よ  
我らに平安を与え給え

(記・豊福純生)

## 男声合唱『若者たち』～昭和歌謡に見る4つの群像～

編曲者の信長貴富は、ひとつの時代のポピュラーソングを集めて世相を映し出そうと試み、先に混声合唱に編曲していた「戦争を知らない子供たち」、「若者たち」、「拝啓大統領殿」に続き、合唱団お江戸コラリーアーずの委嘱を機に、「ヨイトマケの唄」を加え、新たな視座で、この曲集をまとめようとした。

この曲集は、昭和中期の若者と現代の若者は、社会変化の風圧を強く受けているという点において共通点が多いと感じ、昭和歌謡に見る4つの群像を通して、現代社会の様相を照らし出そうとしている。

### 戦争を知らない子供たち

60歳以上の方はともかく、平成生まれの年齢層もこの曲を知っている人は多いと思うほど若い世代を表現した代表的な曲である。

この曲は、1970年大阪万博のイベントステージで「全日本アマチュア・フォーク・シンガーズ」というグループが歌うために作られた楽曲。翌年ジョーローズ(杉田二郎・森下次郎)の歌唱によるシングルが発売され、オリコン最高11位、累計売上30万枚以上のヒット曲となった。ジョーローズはこの年のレコード大賞新人賞、作詞の北山は作詞賞を受賞した。

終戦の翌年1946年に生まれた北山は、最初加藤和彦(音楽プロデューサー・作曲家・歌手)に作曲を持っていたが断られ、ジョーローズの杉田に話を持っていくと杉田は詩の内容に感銘を受け喜んで引き受けた。

当時は悲惨な戦争体験をした戦前生まれの人が大勢いた時代。戦争に対する意識や歌詞の解釈、世代間のギャップなどからこの曲に対する批判も多かったが、後世に残る代表的な「反戦歌」となった。

### 拝啓大統領殿

「脱走兵」の曲名として世界で最もよく歌われる反戦歌の1つで、フランス人の小説家でありジャズトランペッタ奏者ボリス・ヴィアンが1954年に発表した。1954年のフランスは、インドシナ戦争の敗北とアルジェリア戦争が勃発した年であり、この曲がコンサートで歌われると「反愛国主義的」であるという理由で妨害行為が行われ、1958年にはこの曲のラジオ放送と販売がフランス全土で禁止となった。

この歌が再び歌われたのは、1965年アメリカで反戦運動の際にピーター・ポール&マリーというグループの1人、ポール・トラヴァースが「平和主義者」というタイトルを付けて歌ったことから始まった。日本では、1968年「受験生ブルース」などのヒットがある高石友也がこの歌を翻訳して「拝啓大統領殿」というタイトルで歌い、他には小山卓治、沢田研二らが歌っている。

### 信長貴富 プロフィール

日本の合唱界で今話題を独占している新進作曲家であり、常に複数の作曲依頼を抱えている。小学校の頃から合唱に親しんでおり、大学時代には全日本合唱連盟の主催する「朝日作曲賞」に入選、特に音楽教育を受けたこともなく作曲も独学である。大学卒業後公務員を経て、1997年に作曲家として独立する。

ポップス作品の合唱編曲も積極的に手がけており合唱界では常に歌われているが、歌曲や器楽曲にも積極的に取り組んでいる。西南シャントワールは2007年に「時代～ニューミュージックと呼ばれた歌たち～」を委嘱した。

### ヨイトマケの唄

2012年第63回NHK紅白歌合戦で美輪明宏が熱唱したことで一躍注目をあび、広く知られるようになった。「ヨイトマケ」とは、当時建設工事現場で行われる地固めの際、滑車を使って重い鉢を数人がかりで引張り上げる時に発する「ヨイと巻け！」という掛け声のことである。

この曲を作るきっかけとなったのは、ある炭鉱町の公民館で行った自身のコンサートで、安い賃金をつぎ込んでまでも大勢詰め掛けた労働者の光景を見て、この人達を歌へ励ましてあげたい、この人達に寄り添う歌を歌いたいということを痛切に感じたことからである。美輪は、当時、銀座7丁目にあったシャンソン喫茶「銀巴里」に出演後、うしろの座席に座っていた時、学生と知り合い、家族を養うために働く母といじめを受けながらも学び続け将来エンジニアになる子供というストーリーを着想する。

この曲を発表したのは1964年自身のリサイタルであった、その後歌詞の中に差別用語が含まれていることから日本民間放送連盟により要注意歌謡曲に指定され、それ以降民放では放送されなくなってしまった(1983年にこの制度は廃止される)。

2000年、桑田佳祐が自身の番組『桑田佳祐の音楽寅さん～MUSIC TIGER～』でこの曲を歌ったことで再び注目され、以降多くの歌手が歌うきっかけとなつた。

### 若者たち

この「若者たち」は小学校・中学校の音楽教科書にも掲載されていたので、広く知れ渡り親しまれてきた曲である。

1966年テレビドラマ『若者たち』の主題歌として、ザ・ブロードサイド・フォーが歌い発売された。発売当初の題名は「若者たち一空にまた陽が昇るとき」と副題が付されていた。5人の兄弟が幼くして両親をなくし、貧しいながらも力を合わせて生きていく内容が支持され、このドラマと合わせて広まっていった。1967年『若者たち』(森川時久監督)で映画化された時も主題歌として使われている。

(記・伊徳 諭)

## 『ロシア民謡集』

### 【ロシア民謡】

18世紀、ロシアのアンナ女帝は西欧音楽を積極的に取り入れ、貴族の没落が激しい西欧に代わり、イタリアオペラの有力な庇護者となり、若い貴族には音楽留学する者もいた。一方、農村で歌い継がれてきた狭義のロシア民謡である「抒情歌」が、18世紀後半に西欧文化と融合し、ロシア語の歌詞と西欧的な和音伴奏を特徴とする「ロシア歌謡」が生まれた。さらに、19世紀になると、都市に引き寄せられた農民層から駆者、船曳き、兵士、盗賊、囚人などの多様な社会層ができて独自の歌謡が生じ、日本ではこれをも広義のロシア民謡と呼んだ。

ナポレオン戦争でフランス文化と接触した若手の貴族は、故国で革命を図ったが敗れて囚人として流刑され、その怒り、悲しみが「バイカル湖のほとり」「仕事の歌」などの歌となって人々に歌い継がれた。その一方で宮廷貴族世界では「赤いサラファン」などの抒情的な旋律の「ロシア・ロマンス」というジャンルが誕生、その後のチャイコフスキーなどの作曲家に大きな影響を与えた。

### 【エピソード～カチューシャと西南学院グリークラブ】

「カチューシャ」といえば、昔は歌声喫茶やダークダックスで、現在はアニメの「ガールズ&パンツァー」で若者に人気を博し、日本人に最も親しまれているロシア民謡のひとつである。

この経緯を辿れば、戦後活動を再開した西南学院グリークラブが、1947(昭和22)年、新進気鋭の石丸寛(当時23歳)氏の指揮により戦後第1回朝日合唱コンクールで優勝した。この時の自由曲が石丸氏編曲による「カチューシャ」で、氏が東京のソ連大使館で兵隊達が歌うのを聞きとり“村の娘カチューシャ祭りの赤き花…”と歌詞をつけたものであった。本日は、第2部のステージで演奏いたします。

### 1 ヴォルガの舟歌

河川での船の運航は下流へ行く場合は川の流れに乗って進めたが、上流に上るには人や馬が曳いた。船曳人夫は、体にベルトを巻いて岸辺や浅瀬を歩き続けて船を曳いた。こうした労働は1929年にソ連政府が禁止するまで続けられた。過酷な労働に苦しんだ彼らの血と汗と涙から生まれた、地の底で呻くような労働歌。この曲はバス歌手の登竜門として歌われていたが、赤軍合唱団の行進曲風の力強い編曲で広く演奏されるようになった。

### 2 コサックの子守歌

圧政、貧困から逃れた農民は南ロシアに住んでいたコサックと暮らすようになり、やがて軍事共同体を形成して独立国家の形となるようになり、モスクワ政府は彼らを国境地帯の警備に利用した。

赤子の母親は、チェチェン族と闘う父親のように、勇猛なコサック兵士となることを運命付けられた我が子との未来の別れの時を想い、今はまだ月の光の中で安らかに眠る子供への愛情を切々と歌う。

### 3 オレーヴ公の歌

9世紀後半、ヴァイキングを始祖とする小国を統治していたオレーヴは周辺の國々を破り、現在のウクライナの首都キエフを都として統一国家「キエフ公国(キエフ・ルーシ)」を建国した。この「ルーシ」がロシアの語源であるが、ロシアといつても、ほぼ現在のウクライナにあたる。

勇壮なロシアの英雄が大地に轟けとばかりに雄叫びを上げる。歯切れの良いパリトン独唱と大地を踏みしめ進む男声合唱が勇ましい。

### 4 紅色のサラファン

サラファンとはロシアの袖無しの長いドレスで婚礼の晴れ着。赤いというロシア語には美しいという意味もある。

原詩は10番まであり、娘の婚礼衣装として赤いサラファンを縫う母親と、まだ結婚なんて全く興味が無い娘の対話となっている。若さに溢れ樂しくはしゃいでいるのは、人生のほんの僅かな時間。そんな現実を自分の娘に切々と説く母親と、聞く耳を持たない若い娘との掛け合いが面白いが、日本の訳詩では母が娘に言い聞かせる形式になっている。

### 5 郵便馬車の馴者だった頃

馴者は一度仕事に就けば長期間、長距離に亘る。快活に歌われることが多い「ロイカ」も、原詩は馴者である恋人を待ちきれぬ娘が地主に嫁ぐ嘆きである。

この曲の主人公は老人。街道沿いの居酒屋で、昔の悲痛な思い出を語る。仕事に追われるなか、彼の恋人が吹雪の中で命を落とした。心の痛手は酒を浴びるように飲んでも癒されず、却って傷を大きくする。馴者であつたがために直面した悲劇は男の運命をどう変えたのだろうか。

(記・豊福純生)

## 男声合唱組曲『富士山』

### 【草野心平と富士山】 草野心平(1903年～1988年、福島県石城郡上小川村(現・いわき市小川町)出身)

富士山は心平の詩に頻出し、詩集『富士山』も編んでいる。1940年から1951年にかけ富士についての詩を発表し続けた。この間、家族を連れての南京移住と敗戦による帰郷、苦惱の果ての文壇復帰と、波乱の時代を生き、富士山をめぐつても、東洋に君臨する日本精神の象徴としての富士山(戦前)から、人間世界を超えた〈大存在〉としての富士山(戦後)へと、時代による変化が見られる。それは20世紀なかばの日本人全体の心の記録である。

### 【多田武彦と富士山】 多田武彦(1930年～2017年、大阪府大阪市生まれ)

前作「柳河風俗詩」が師の清水脩に「概ね良く出来ているが声域に囚われ過ぎ」と評されたため、1956年に作曲した「富士山」では「声域を気にし過ぎずに力強くスケールの大きい曲」に仕上げたと自身で語っている。

この作品においては、第5曲(作品第貳拾壹)に1950年代のアメリカンポップスのようなコード進行やストラビンスキー的な箇所が見られ、「前衛音楽」の先駆者オリヴィエ・メシアン(フランス)の著書が1954年に日本で出版され、その中で挙げた3つの旋法を使っている部分が見られる。

メシアンの著作は日本の多くの作曲家に影響を与えたが、保守的な作曲家として知られている多田が、当時の日本の合唱界に最新の前衛の風を吹き込んだことだ。

### 1 作品第壹

富士の麓で展開される原始的祭典。「夢見る私の富士の祭典」と繰返す毎に絵巻物のような世界が展開される。蝶や鳥や獣や人までもが富士の麓で春に酔い、大雪嶺(ヒマラヤ)からは黄鳥が使者となって日本へ渡つてくる。冒頭のパリトン、ベースによる調性のない5度の響きが尊く古代幻視。

### 2 作品第肆

春の河原での少女たちの遊戯に郷愁を誘うが、春愁がテーマとなっている。明るい風景の中で、富士山までもが少女らと縄跳びで遊んでいるように錯覚する。頬に当たる春の陽光に詩人の憂鬱は一層際立ち、両手で顔を覆い思わず涙する。1番と逆にテナーの先唱が宗教曲のように合唱を導く。

### 3 作品第拾陸

関東の牛久地方から山々の背後に見える黒い富士の神々しさ。関東平野の遙か西方に立つ、日没時の黒いシルエットの富士と夕日に映えて金色に輝く雲。富士は神のように存在を超えた選る。「さくらんぼ色は段々沈み」の微妙な和声の色彩の変遷が、夕暮れの空の色の移り変りを見事に現わす。

ここまでが日本の敗戦以前の「富士山」であり、以下は戦後の「富士山」となる。

### 4 作品第拾捌

地球の中心に連なる富士の存在感。「富士」という語は使われず、「黄銅色の大存在」と表現しているだけである。その大存在は地軸と天とを繋いでいる。冒頭のきらびやかな色彩感のあるハーモニーは、ブランクのようなフランス風の新古典主義の音楽を彷彿させる。

### 5 作品第貳拾壹

「いきなりガッ」と(目前に現れている)夕映えの富士の圧倒的な存在と美しさに絶句する。その夕映えの富士に宇宙線の、つまり「天」からの大豪雨が降り注いでいる。冒頭の前衛的な響きから始まるこの曲は展覧会の絵(ムソルグ斯基)や火の鳥(ストラビン斯基)を想起させる。

多田武彦のこの二つの曲からは、敗戦の虚脱から富士を自分自身が存在する支えとして再起しようとする詩人の意志を感じとることができます。

全5曲を演奏し終えたとき、アクロス福岡シンフォニーホールに、今までにない『富士山』が現出するのを感じて頂ければ、幸いに思います。

(記・豊福純生)

西南学院グリークラブ創立100周年、併せて西南シャントゥール創立65周年、誠におめでとうございます。この度は記念事業といたしましてのグリークラブ・フェスティバル、及び第42回定期演奏会へ共に登壇させて頂きますこと、心より感謝申し上げます。

愛知県で育った私ですが「西南学院」の名は祖父福永陽一郎の母校として、また共演合唱団として幼少より親しみを持ったものでした。東京や大阪での「東西四連」などで大学男声合唱の迫力に身じろいでいた子供の頃、九州にあるという優るとも劣らぬ「もうひとつのグリークラブ」の存在は私にとってまだ見ぬ憧れの存在だったのです。中学3年になり、わざわざばかり音楽がわかるようになった(?)私へ祖父が「僕がもし死んだらここにあるレコードと楽譜は全部大ちゃんのものだからね」と言ったことがあります。縁起でもない冗談を、とその時は皆で笑っていたのですが、それから半年が経つ、陽一郎は天へと還っていました。その後、最期の舞台を共にしたのが他ならぬ「西南学院グリークラブ」であったことを聞き、陽一郎の振る西南グリーを聴くことができなかつたという悔しさと、陽一郎は最後に西南に、福岡に帰ることができたのだなという安堵と感謝の念が同時に湧いたことを覚えています。

しばらく経って私は上京し、音楽を学び、指揮者と呼ばれるようになりました。それまでの時を過ごした祖母暁子の家には西南グリーOBの皆様から毎年のようにお花が届き、暖かいメッセージのこもったお手紙や、さらには遠方よりご来訪を頂く機会もしばしばありました。その度に暁子が「西南のみなさんが一番よくしてくださるのよ」と言い、福岡での思い出を楽しそうに聞かせてくれたことを思い出します。3年前にはありがとうございました「福永陽一郎ライブラリ」として陽一郎が残した膨大な楽譜資料を西南学院が整理管理して頂けるとのお申し出を頂き、多くのOBの皆様のご助力を得て陽一郎の楽譜は福岡へと運ばれ、西南学院へと収められました。

西南に育まれ、その演奏ひとすじの道を西南との舞台で終えた福永陽一郎。最後となったその日に演奏された作品は「月光とピエロ」、それは本人曰く「人生で最も多く演奏した合唱曲」がありました。かつて孤独を憂い月を見上げていたピエロは、天に昇り、月のそばへと今はその身を寄せているのでしょうか。

「月はみ空に 身はここに」。陽一郎のみならずこれまでの西南グリーの100年を支えてきたひとりひとりの1年、1日、すべての時間が重なり、導かれた「現在」がまた、これから西南グリーの100年を導くものでありますよう願って、この良き日と共に過ごしたいと思います。西南グリーよ、永遠に！

小久保 大輔

客演指揮／小久保大輔 *Kokubo Daisuke*

'98年東京音楽大学器楽科卒業。指揮を桐田正章、汐澤安彦の各氏に、トランペットを林昭世氏に師事。在学中よりアマチュアオーケストラの指導にあたり、2000年より東京文化会館オーケストラフェスティバルにおいて新日本交響楽団を指揮。2001年、横浜カントーレ公演オペラ「毒か薬か物語」「俊寛」を指揮。同年、20世紀音楽の研究・演奏団体「ガレリア」を設立、2004年からはプロ吹奏楽団「ガレリアウインドオーケストラ」としても活動を展開させた。2009年より劇団四季において「ウェストサイド物語」「サウンド・オブ・ミュージック」「オペラ座の怪人」を指揮。

>  
現在、マルティナショナルプラスアンサンブル、法政大学アカデミー合唱団音楽監督。横浜ルミナス・コール、ラスペート交響楽団各常任指揮者。鎌ヶ谷フィルハーモニック管弦楽団、東京農業大学全学応援団吹奏楽部、藤沢福音コール各指揮者。



指揮／毛利正明 *Mouri Masaaki*

1965年西南学院大学商学部商学科卒業。  
在学中、西南学院グリークラブ創立45周年記念演奏会にて、客演指揮者の故・福永陽一郎先生の指導のもと学生指揮を担当。  
1964年京都市で開催された全日本合唱連盟主催全日本合唱コンクール大学の部において第3位となる。  
在学中より西南シャントゥールの団員として合唱活動、現在に至る。



オルガン／古賀 智子 *Koga Tomoko*

福岡女学院高等学校音楽科、東京藝術大学音楽学部器楽科(オルガン専攻)卒業。大学在学中、オルガンを廣野嗣雄氏、通奏低音・アンサンブルを今井奈緒子氏に師事。卒業後は国内のマスタークラス等に参加、また神戸松蔭女子学院大学にて鈴木雅明氏、大塚直哉氏のもとで研鑽を積む。現在は福岡女学院オルガニスト、高等学校音楽科非常勤講師として後進の指導にあたり、生涯学習センターでは一般の方にも親しめるオルガン講座を行っている。これまでに福岡・宮崎・関東圏のプロムナードコンサートに出演。近年は教会を中心にソロやアンサンブルでの演奏活動を行っている。

日本オルガニスト協会会員、福岡城南教会オルガニスト。



ピアノ／植村和彌 *Uemura Kazuhiko*

福岡教育大学教育学部中等教育教員養成課程音楽専攻卒業。  
同大学院教育学研究科音楽教育専攻演奏学講座修了。  
ピアノを片山由紀、倉員由紀子、福田ひろみ、福田伸光の各氏に師事。  
第43回、第45回、第47回北九州芸術祭において伴奏賞受賞。  
アンサンブルピアニストとして数多くの演奏会に出演し、多くの声楽家や管弦楽器奏者、合唱団と共に演奏を重ねている。西南シャントゥール、久留米音協合唱団、修道館月いち合唱団ピアニスト。  
西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」ピアニスト。  
九州産業大学人間科学部講師。

予告



西南シャントゥール 第43回定期演奏会

客演指揮：時任康文

武蔵野音楽大学器楽科卒業後、東京音楽大学指揮科に学ぶ。指揮法を石谷一衡、汐澤安彦両氏に師事。  
小澤征爾氏、若杉弘氏、秋山和慶氏等のアシスタントを務める。東京交響楽団を中心に、東京フィル、日本フィル、新日フィル、神奈川フィル、名古屋フィル、東京佼成ウインドオーケストラ、大阪市音楽団等を指揮し好評を博す。

「愛する歌」・「雪霧の路」ほか

2020年11月14日(土) ● アクロス福岡シンフォニーホール

( )は卒業期(西暦年次)です

《第IIステージ賛助出演》 西南グリーOBシンガーズ

当然ながら西南学院グリークラブのOBで構成された合唱団ですが、働き盛りの40~50歳代でとてもシャントゥールの活動には参加できない、福岡県以外の遠隔地に住んでいるため何度も福岡での練習には来れない、そしてこの演奏会のためにはるばる東京からやってきた東京OB会や関西OB会、さらにはシャントゥールのメンバー等それぞれの面々が集まった合唱団です。

私達は大学を卒業してかなりの年月が経ちますが、学生時代に没頭した合唱ハーモニーの心地良さは今も忘れることができません。しばらくは合唱から遠ざかっていましたが、多忙の中でも1ステージでもいいから歌つてみたいという者が次第に集まり、貴重な休みを調整して月1~2回の練習に励んできました。

先輩格である「西南シャントゥール」の定期演奏会で1ステージをいただいてから、今年で6回目の賛助出演となります。活動は継続しているものの、転勤で参加できなくなった者、仕事でどうしても毎回の練習に参加できない等不安要素は消えませんが、本日ご来場いただきました皆様に男声合唱ハーモニーの魅力を精一杯お聴かせたいと私達一同肝に銘じて歌います。シャントゥール同様お楽しみいただければ幸いです。



指揮／井手 敏彦 Ide Toshihiko

西南学院大学経済学部卒 83期生。大学2年の時副指揮者兼セカンドテナーのパートリーダーを務め、3年の冬、アメリカ演奏旅行で正指揮者デビュー、成功に導く。卒業後は郷里長崎県波佐見町に帰り、小学校の教員になる。ほぼ同時に地元の児童合唱団の指導を受け、次いで男声合唱団「オールドダックス」、「波佐見混声合唱団」の3つの合唱団を20数年指導を続けている。

今までの「西南グリーOBメンバーズ'80~」でも指揮をして、今後若手の指導者として期待されている。

| 1st Tenor | 2nd Tenor | Baritone | Bass    |
|-----------|-----------|----------|---------|
| 安倍 伸一     | 井手 敏彦     | 朝山 澄彦    | 綾部 武利   |
| 井筒 達夫     | 日下部 一徳    | 伊徳 諭     | 磯貝 豊    |
| 大山 輝久     | 窪田 敏博     | 里中 健     | 井手 輝実   |
| 城 保之亮     | 黒江 量二     | 高嶋 裕二    | 岩崎 嘉範   |
| 田中 幸雄     | 篠原 隆盛     | 谷野 繢     | 朔 正毅    |
| 徳永 正章     | 砥上 雅寿     | 藤 寿      | 野間 利博   |
| 中竹 茂美     | 時枝 典生     | 友永 史朗    | 福田 誠司   |
| 中野 克彦     | 原 裕一      | 中嶋 恒生    | 藤本 伊久磨  |
| 野田 誠一     | 廣崎 公伸     | 前田 英彦    | 宮地 純    |
| 藤島 整      | 前田 元一     | 牛嶋 昭     | <東京OB会> |
| <東京OB会>   |           | 金子 泰久    | <東京OB会> |
| 岡田 和夫     | <東京OB会>   | 田中 架扇    | 大中 豊潔   |
| 木下 俊彦     | 石丸 貴康     | 野路 和幹    | 岡 潔     |
| 角澤 淳行     | 古瀬 哲也     | 林 秀郷     | 樋口 一法   |
| 飛松 富士夫    | 霜村 元吾     | 保家 大司    | 邑本 真司   |
| 堀米 能文     | 田中 穂積     | 松岡 比呂史   | <関西OB会> |
| 村上 正道     | 永留 幸明     | 森 猛      | 中野 裕之   |
|           |           |          | <関西OB会> |
|           |           | 坂田 浩     | 坂田 克己   |
|           |           | 佐々木 明博   | 早川 明博   |

西南シャントゥール

| 1st Tenor  | 2nd Tenor  | Baritone   | Bass       |
|------------|------------|------------|------------|
| 宮地 基次 (54) | 刀根 亨一 (48) | 鈴木 勸 (62)  | 木道 昇 (54)  |
| 阿部 昌弘 (57) | 的野 蒼一 (53) | 篠崎 詔二 (68) | 田中 義信 (55) |
| 高木 正志 (59) | 野辺 和馬 (59) | 佐藤 棟也 (70) | 靄 喜廣 (57)  |
| 日高 良公 (65) | 一柳 隆治 (64) | 松尾 淳郎 (70) | 八尋 一雄 (59) |
| 上野 善幸 (67) | 下田 昭 (64)  | 山下 博英 (71) | 佐藤 忠芳 (64) |
| 飛松 智明 (68) | 佐藤 宗一 (65) | 小西 真二 (71) | 毛利 正明 (65) |
| 平塚 郁男 (69) | 黒江 量二 (65) | 里中 健 (71)  | 夏秋 納昭 (66) |
| 木山 和文 (69) | 石橋 信彦 (66) | 梶原 博司 (74) | 武藤 新 (68)  |
| 宮城 研二 (69) | 徳永 武雄 (68) | 高嶋 裕二 (76) | 森 博彦 (69)  |
| 倉地 進 (71)  | 石松 茂 (69)  | 宮越 健雄 (79) | 八尋 恵二 (69) |
| 坂部 雅夫 (71) | 山本 武裕 (69) | 伊徳 諭 (80)  | 角 正信 (70)  |
| 大司 真 (73)  | 高川 弘幸 (70) | 藤 寿 (86)   | 中垣 登 (72)  |
| 山口 聰 (75)  | 山元 一憲 (70) |            | 朝山 澄彦 (76) |
| 杉本 哲也 (75) | 窪田 敏博 (71) |            | 岩崎 嘉範 (80) |
| 別府 義彦 (76) | 眞鍋 敬介 (71) |            | 宮地 純 (83)  |
| 豊福 純生 (78) | 山下 悅朗 (72) |            | 福田 誠司 (85) |
|            | 砥上 雅壽 (75) |            | 綾部 武利 (85) |
|            | 藤井 政重 (75) |            |            |

西南グリーOBシンガーズ: 第1ステージ出演

|            |            |
|------------|------------|
| 中竹 茂美 (83) | 谷野 繢 (80)  |
| 城 保之亮 (89) | 友永 史朗 (81) |
| 田中 幸雄 (91) | 磯貝 朔 (80)  |

朔 正毅 (80)

西南グリーOBシンガーズ: 第3ステージ出演

|            |            |
|------------|------------|
| 中竹 茂美 (83) | 谷野 繢 (80)  |
| 城 保之亮 (89) | 友永 史朗 (81) |
| 田中 幸雄 (91) | 磯貝 朔 (80)  |

西南グリーOBシンガーズ: 第4ステージ出演

|             |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 飛松 富士夫 (71) | 星田 恒 (65)   | 森 猛 (62)    | 井手 輝実 (74)  |
| 堀米 能文 (78)  | 廣崎 公伸 (73)  | 野路 和幹 (68)  | 樋口 一法 (75)  |
| 木下 俊彦 (80)  | 霜村 元吾 (75)  | 林 秀郷 (72)   | 磯貝 豊 (80)   |
| 岡田 和夫 (81)  | 井手 敏彦 (83)  | 中嶋 恒生 (73)  | 朔 正毅 (80)   |
| 中竹 茂美 (83)  | 時枝 典生 (83)  | 谷野 繢 (80)   | 友永 史朗 (81)  |
| 安倍 伸一 (85)  | 永留 幸明 (83)  | 松岡 比呂史 (81) | 早川 明博 (81)  |
| 村上 正道 (87)  | 田中 穂積 (85)  | 佐々木 克己 (82) | 中野 裕之 (81)  |
| 藤島 整 (88)   | 古瀬 哲也 (86)  | 坂田 浩 (83)   | 佐々木 大中 (82) |
| 城 保之亮 (89)  | 中野 克彦 (87)  | 保家 大司 (86)  | 岡 潔 (86)    |
| 徳永 正章 (89)  | 原田 郁夫 (91)  | 金子 泰久 (87)  | 藤本 伊久磨 (86) |
| 田中 幸雄 (91)  | 篠原 隆盛 (92)  | 牛嶋 昭 (89)   | 邑本 真司 (89)  |
| 角澤 淳行 (91)  | 福島 龍則 (92)  | 坂井 克英 (91)  |             |
| 井筒 達夫 (92)  | 原 裕一 (92)   | 田中 架扇 (91)  |             |
| 石丸 貴康 (93)  | 田町 大輔 (94)  | 久保 稔 (92)   |             |
| 大山 輝久 (94)  | 日下部 一徳 (96) | 本田 顕一郎 (92) |             |
| 野田 誠一 (96)  | 前田 英彦 (96)  | 廣瀬 公典 (92)  |             |
|             |             | 轟木 保弘 (99)  |             |